

黄八丈めゆ工房

代表者：山下 誉

所在地：〒100-1623 東京都八丈島八丈町中之郷 2542

Tel : 04996-7-0411

活動の目的

本場黄八丈を産出する八丈島は、東京から南に約 290 キロ隔たる“いきの島”、“沖の島”が絹織物の八丈の長さ由来して八丈島と名づけられている。この島における八丈絹の始まりは、すでに平安時代の「新猿樂記」や、鎌倉時代の「東艦」に見ることができる。八丈紬には、黄八丈と鳶八丈と黒八丈があり、代表的な黄八丈は島に生えている八丈刈安（コブナグサ）を染料にする。鳶八丈はマダミ（タブ）の生皮で染める。また黒八丈は椎の木の皮を用いる。

土地に根つき、島の自然を染めに生かして脈々と続いている伝統ある黄八丈の古法を守り、後継者育成のため染色業を営んでいた山下誉氏は平成元年“（有）黄八丈めゆ工房”を開設した。黄八丈をはじめとする伝統技術による製品作りと、伝統技術の維持に努めている。



本場黄八丈の着物

1. 活動状況

① 人員構成：

機織関連 10 名、染色関連 3 名、その他 1 名の構成で活動している。

② 生糸購入：

生糸は群馬県碓氷製糸農協から購入し、特に新小石丸糸を指定している。群馬県オリジナル蚕品種（世紀二一・群馬 200）の生糸を使用しているが、新小石丸糸が原蚕種小石丸に比較的近く、味のある黄八丈に仕上がる上に、物語性がある。価格は先方で決める。

③ 製織：

製織はすべて手織りである。

④ 染色：

全て草木染。色は黄、樺、黒の 3 色である。

黄八丈：八丈刈安の煎じた染液を柄杓で絹練糸にかけながら浸す（ふし付け）。糸を絞って乾燥作業を 16 回（16 日間）繰り返した後、樺と榊の灰汁にて媒染、美しい黄金色に発色させる。

黒八丈：椎の樹皮を煎じた染液で絹練糸を 15 回ほど‘ふし付け’した後、鉄分を含んだ泥土に浸して鉄媒染する（沼づけ）。水洗乾燥 5～6 回後再びふし付



高機にて手投げ杼で織る

け、沼づけを1、2回して水洗・乾燥で渋い黒色に発色。

鳶八丈：樺色を主調色にした織物。島内産マダミの樹皮を砵で細かくし煎じて染液をとる。

染法は黄八丈とほぼ同じであるが、木灰の灰汁で触媒する。晴天40日といわれるほど日数と手間がかかる。



ふし付け

2. 製品の展示普及

①主な製品：

黄八丈反物（黒八丈・鳶八丈を含む）

②製品の展示：

2年か3年に一度「銀座みきもと」で製品展示を行っている。

③製品の販売先：

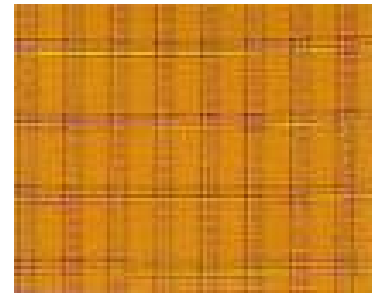
呉服問屋・京都室町・東京日本橋に販売しているが、受注生産は行わず生産品を引き取って貰う方式をとっている。



黒八丈



鳶八丈



黄八丈

「工房 洞」手作り絹研究会

代表者：早川たか子

所在地：〒193-0943 八王子市寺田町 432-207-2

Tel・Fax：042-664-1089

活動の目的

「工房 洞」手作り絹研究会は、多摩ニュータウンの開発予定地の養蚕と酪農を残そうと運動をしていた「ユギファーマーズ」との出会いがきっかけで、昭和 63 年に発足した。

人類は長い歴史の中で自然の法則により目的にかなった道具を生みだし、それを使って労働する実用的な生活技術を土台にして生活文化を築いてきた。この具体的な体験・思考の積み重ねである伝統的な生活技術を、生活に根ざした実用的な生活技術として継承する意義がより一層重要となっている。

このような考えの基に「工房 洞」は、長い年月をかけて生活の中から経験的に作り上げてきた絹作りの伝統的技術を、現代の科学的裏付けのもとに、「生活の中に手作り絹を」をモットーに繭から糸作り、染織までを各工程のテーマごとに「手作り絹研究会」を開き、作品は多摩織の技法から学び、その伝統的織物を生活の中で活かし継承していくことを主眼に進めている。また、経験者や初心者問わず繭から糸作り、そして各種織物まで一連の工程の「手作り絹研究会」を随時開催し、参加者が新たな発見・創意・喜びをもてる研究会を目指し、その時々テーマで自主的なグループ活動としての「手作り絹研究会」が、早川たか子氏を中心に運営されている。

研究会の活動

当研究会は「生活の中に生きる絹の作品」を、「作り」「使い」「集い伝える」の3つの柱をモットーに進めている。

当研究会の活動は、1) 繭から糸作り、絹織物の創作 2) 絹作りの体験学習を軸にした社会教育活動 3) 作品の展示普及の三つに大別できる。以下その活動概要を示す。

1) 繭から糸を作り、絹織物を創作する

当研究会の活動の中核は糸から絹の染織に至る一連の物作りである。

①原料繭の入手：

必要な量の普通繭は養蚕家や製糸工場（長野、群馬）から購入しており、普通繭の一部は体験学習や研究会の教材用に使われる。また、会員の希望により年間 10～15Kg 程度の生繭を購入



研究会活動の風景

することがある。

②生糸類の準備:

会員が手挽きや座繰り繰糸法により製造した生糸の他、研究機関で開発された新形質生糸及び製糸工場から普通生糸や玉糸を購入、また八王子の業者より輸入糸や紬織り用に真綿手紡糸を購入して使用している（年間平均 20Kg）。なお、真綿作りからつむぎ糸作りも行う。

③糸の加工:

撚糸は会員の希望により八王子の八丁撚糸その他専門業者に依頼する。精練はクエン酸精練が中心で各会員が精練するほか八王子の業者に依頼する。染色は、先染めは草木染が中心で各会員が染色をする。

④織物の創作:

2004年八王子の伝統的工芸品産業「多摩織」を実用的生活技術として継承するため、織機をはじめとする関連機器を居住環境に合わせ、市販のコンパクトな織機に種々改良を加えて、団地の居住空間でも初心者でも絹織物が織れるようにした。改良したコンパクトな織機で着尺・帯など工夫して織っているほか、暖簾やストールなど身近な暮らしに生きる絹織物の創作活動を行っており、風通織や幅広織物、複雑な緋は求める風合いによって通常の高機で織る。また、工房には座繰器、手紡糸の道具や緋ずらしの道具、整経などの機準備の道具一式が用意され、糸作りから絹織りまで一貫して行うこともできる。



2004年ハイブリッド絹展展示

なお、当会は多摩織の技法から学んでいるが、その技法にこだわらない創作活動であり、今の時代に「絹の道」を歩き、今の時代に生きる「絹織の道」をめざし、「多摩織の規格」と「多摩織ずらし緋と一楽織」（伝統工芸士 中山壽次郎氏著）を基軸に会員が織物設計、製織した創作作品を「絹道織」と命名している。

2) 社会・地域の教育活動

当研究会は日本の伝統的産業である養蚕・製糸・織物技術を伝承しようと、親子体験学習を行ったり、日常の用に足りる絹作りを次代に継承できるように指導方法を実践的に研究している。さらに、地域文化を創出する学習集団として、養蚕、製糸の技術や染色、撚糸、織の基本的な技術をマスターし、それぞれが取得した知識や技術を伝えることを通して、絹の素晴らしさを地域で共有し、その地域の生活文化の礎となることを目指している。

3) 製品の普及活動

当研究会の「生活の中に生きる絹織物」の趣旨から、会員の製品は個人用の着尺や帯を中心とし、日常生活用品としての小物類も創作され、グループ展である「絹の道の織」展の開催をはじめ、各種団体が主催する展示会にも出展している。



「絹の道の織展」への出展



展示会の出展

また、多摩織を実用的な生活技術として継承するため、「伝統的工芸品産業多摩織の規格」と「多摩織ずらし絣と一楽織」（伝統工芸士 中山壽次郎氏著）を実践的に学ぶ研究会を開催し、体験学習、研究交流会、展示会等のワーキングチームを随時組み活動している。

多摩シルクライフ 21 研究会

代表者：小此木エツ子

所在地：〒184 - 0011 東京都小金井市東町 4-28-3

Tel:042-381-5230 Fax : 042-381-5240

活動の目的

東京の多摩地区は、かつてその中心に位置する八王子が「桑の都」と呼ばれたように養蚕が極めて盛んな地域で、生糸や絹織物の生産も盛んに行なわれていた。近年は都市化の波に押されて桑園が減少して繭、生糸の生産は壊滅状態に陥ったものの僅かながらも養蚕は続けられている(繭生産量約1トン余)。これに対し、この地域の周辺での絹織物の生産は依然として活発で、製品は「多摩織」、「村山大島紬」の名で国の伝統的工芸品に指定されており、先練りの和服生地から和・洋品小物類まで、絹を愛好する消費者の幅広い用途に供されている。

そのため、この地域には蚕糸に関する豊富な知識を持ち、古くからの蚕糸・絹の生産技術を伝承する人が多く、小此木エツ子氏が中心となって、多摩地区及びその周辺で絹の生産活動を進めている養蚕・製糸・精練等の絹素材の生産者とそれらの技術開発に携わっておられる方々、絹の染織、デザイン、縫製等の作家工房や絹の流通業者、評論家等を網羅して、「多摩シルクライフ 21 研究会」を組織し、古くからこの地域で伝承されてきた技術を基に、絹の特徴をより一層発揮させるための最適な加工技術を組み立てて優れた絹製品を製造するとともに、蚕糸・絹業にかかわる啓蒙、普及活動を進めている。

1. 研究会の活動

この研究会では、近年、わが国においては強健、多糸量の蚕品種が普及し、製糸、染織などの技術も生産性本位に構築されてきたため、製品の風合いや染色性、吸湿性、耐磨耗性などの面で絹本来の特徴が損なわれている場合が多い。研究会ではこのような反省に基づいて、会員である養蚕農家に委託して糸質に特徴のある繭を確保するとともに、会員たちが自ら座繰り繰糸を行なって加工した国産生糸を原糸とし、古くからの優れた染織技術を駆使して製品化したものを「東京シルク」の名で普及させることにより多摩地区の蚕糸・絹業の活性化を図ることを主な目的とし、併せて「東京シルク」のブランド化を図るため、加工技術の改善と製品品質の向上を支援する開発研究を進めるとともに、蚕糸と絹の知識の普及を図るための生涯学習の一環として、小学校での総合科目授業での養蚕・糸作りから、近隣の資料館や博物館での一般市民に対する体験学習などのほか、染織家や一般の絹愛好家に対する学習会等も実施している。

2. 「東京ブランドシルク」製品の製造過程

このようにこの研究会の活動は絹製品の製造と普及から、蚕糸・絹の技術研究、一般市民に対する啓蒙まで多岐にわたっているが、活動の中核をなしているものは養蚕・製糸から絹の染織、商品化に至る一連の作家工房の活動であるので、ここでは「東京シル

ク」製品の製造過程の概要を述べる。

①原料繭の生産：

わが国には豊富な蚕遺伝資源(原蚕種)が保存されているが、繭糸の性能が優れていても生産性が劣るため一般に普及していないものが多い。研究会ではそれらの中から「青熟交配種」と「四川三眠交配種」、小石丸など繭糸の性状に特徴のある蚕品種を選び、作家工房の希望に応じて会員の養蚕家に委託してそれらの繭を全齢桑葉育で生産している。なお、養蚕家では各々の余裕に応じて普通品種の繭の生産も行なっており、生産量は合わせて約1トンである。



会員らによる繭の収穫・出荷風景

②製 糸：

会員が自ら塩蔵法(生繭を塩と混ぜて密封貯蔵)で保存した生繭を、繭糸の物性を損なうことの少ない座繰り法(手作業を中心に低張力で繰糸)で繰糸した生繰り生糸の他、一部は製糸工場(長野)に委託して玉糸や太織度低張力生糸、扁平生糸など形状の異なる特殊生糸、普通生糸等を座繰り繰糸によって製造し、さらに普通品種の繭は製糸工場(群馬)に委託して自動繰糸機で普通生糸に加工している。なお、紬織など特殊な織物の原糸に用いる真綿・紬糸などは、福島産地から購入したものを使用している。

③糸加工：

生糸の合撚糸と精練は、会員の希望により一部の糸を除いて専門業者に委託して糸加工を行なっている。合撚糸は湿式八丁撚糸(京都)・乾式合撚糸(八王子)のほか、ポビンレース、刺繍糸用などの張り撚り糸(五日市)を施し、精練は会員が自ら灰汁練りを行なうほか、選択的な精練が可能な合成灰汁練り(別名：ロダン精練法)、酵素練りによる8分練りや9分練りなど、フィブロインを保護する最内層セリシンを残す精練を委託している。

④染 織：

会員が自ら藍染めなどの草木染めを施すとともに、それらの染色糸に適合する織物として、一楽、平織、紬、緋、風通、錦、羅、もじり織、花織、畝織などを高機などの手織りにより織上げているが、一部は八王子の機業者に委託するなどして多様な織物を織上げている。また、白生地は京都の機業者に委託して製織した各種のちりめん類を含めて手描き友禅・型絵染などの染織を行なっている。

その他、綾竹組や籠打組など特徴ある組紐も製造しており、一般の高台や丸台、角台を用いて組上げている。



四川三眠交配種繭の糸の着物

3. 「東京ブランドシルク」製品の特徴

「東京ブランドシルク」製品は会員が自らの目的に合わせて繭・生糸などの原料素材と加工条件を選択し、多様な絹製品に仕上げたものであるが、特に多摩地区産の原料繭を50%以上使用した製品には「東京シルク」のラベルを付けて区別している。

この「東京シルク」の原糸は純白で透明感と吸湿性、染色性に富む生繰りの国産糸であり、緩速度の自動繰糸機と座繰りで偏繰を避けて繰糸したものであるため、膨らみと弾力も併せ持っている。そのため、これらの生糸を原糸とする製品は染め上がりが美しく光沢に富み、手触りなど風合も優れるなど、着用性能には定評がある。

4. 「東京ブランドシルク」製品の普及活動

会員が製作した製品の個展やグループ展を始め、[東京シルク展]等の展示会を適宜開催(東京シルク展は隔年開催)するとともに、他の各種団体が主催する展示会にも積極的に参加して「東京ブランドシルク」製品の普及を図っているほか、各会員が個別に問屋を通じて販売も行なっている。



第4回東京シルク展展示

繭の芽 STUDIO

代表者：筋誠 珠実

所在地：〒229-0205 神奈川県津久井郡藤野町日蓮 1573

Tel : 042-687-3528

活動の目的

手織りをするため、素材としての“魅力のある絹糸”を求め、座繰り器で糸を挽いたり、紡いだり、糸づくりを始めてから蚕の品種特性へたどりついた。繭から糸へ、そして布にいたるまでの工程で、絹糸は熱や張力など様々な影響を受ける。蚕品種のそれぞれが持っている特性を生かした織物をつくるためには、なによりもまず原種の蚕がつくる繭の糸質を知ること、蚕品種本来の手触りを指先で感じながら糸を繰り、染めて、織ることである。これらのことを体験し、実践するため桑の栽培や蚕の飼育から手織りまでの工程を一貫した手仕事で行なっている。



桑園の管理・摘葉

1. 活動状況

①主な製品：

手織りの布、ショール、着物を製作している。

②原料繭：

過去に3回ほど養蚕農家へ委託飼育を依頼したことがある。品種は一代交雑種。価格は、品種が特殊なもので繭が小さいため、その蚕期の現行品種飼育費の約2倍を規準とし委託した。

現在では、原料繭として工房で飼育した繭を使用している。

③生糸製造：

生糸および玉糸を手回し上州座繰り器で繰っている。絹特有の軽さと暖かさ柔らかさといった手触りを損なわないように、糸を挽く時は強い織りをかけずに、また張力かけないように、ゆっくりとした速度で挽くようにしている。

④染色および製織：

すべて植物染料で染めている。織は手織り機で製織している。



座繰り器による繰糸



手織り機での製織

2. 展示普及

個展を不定期に開催している。シルク関係団体の主宰する展示会にも出展している。



経絣布（小石丸）



03年展示会（青熟、はくぎん）

3. 製品の販売先

製品は主として個展来訪者に販売している。

4. その他

関連業種の企業との提携、共同事業等を行なっていないが、研究機関で開発した新素材の試織に協力している。

岡谷絹ブランド推進協議会

代表者：宮坂照彦

所在地：長野県岡谷市幸町 8-1 岡谷市役所商業観光課

Tel：0266-23-4811

活動の目的

岡谷は日本における近代製糸業発祥の地として、明治・大正期を中心に「糸都岡谷」と呼ばれてきた。市内で生産された生糸(上糸)は殆どが輸出にまわされたが、それに適さない中質以下の繭から作られる生糸(中糸)は内需用として消費され、それを加工する染織も市内でも行われていた。

第二次世界大戦を機に製糸工場は次第に縮小されて精密工業に変わり、生糸の生産量は激減したが、現在もなお生糸づくりと絹の染織は市内で面々と受け継がれてきている。

このように、絹にこだわりを持つ風土を有する岡谷において、伝統産業の火を次世代に引き継ぐ目的も含めて、地場産業製品としての「おかや絹」への取組みが市の主導で平成の初めにスタートし、「シルク岡谷ふるさと産業研究会」が発足した。

現在、市内の製糸工場では普通生糸をはじめ、玉糸や座繰り生糸、あしぎぬ糸(縮糸)など各種生糸の生産が続けられている。中でもあしぎぬ糸は太織度で、ふしと膨らみのある柔軟な生糸であり、これから作った織物はわが国古来の普段着としての絹の優れた風合を發揮する。あしぎぬ糸を中心としたこれらの糸で作った製品を「おかや絹」と名付けてブランド化するための事業を進めている。

この事業が平成17年7月に国の「JAPAN ブランド育成支援事業」に選ばれたことを受け、同年8月に市内の製糸関連企業と行政などによる「岡谷絹ブランド推進協議会」が発足した。この協議会では外国から安価に輸入されている絹製品と差別化できる新製品の開発や製造をはじめ、岡谷の絹の伝統を受け継ぐ絹加工技術者・織り手などの養成にも力を注いでいる。



絹工房の活動風景

1. 協議会の構成

代表者：宮坂照彦氏

会 員：製糸業者・製糸機械業者、撚糸・精練・染織等糸加工技術者、機織技術者、機台製作者等 30 に及ぶ団体・個人

2. 協議会の活動状況

①あしぎぬ糸の製造：

市内の榊宮坂製糸所において製造されている各種生糸のうち、隣地のJA上伊那農協の繭を原料とし、諏訪式座繰り器・上州座繰り器を用いて繰糸している。

②あしぎぬ糸の加工と「おかや絹」の染織：

「きぬのふるさと岡谷絹工房」を拠点に、会員が独自の感性と技術に基づいて撚糸・精練・染織を行い、手織によりあしぎぬ製品「おかや絹」の製造を行っている。

② 機台の製作：

かつて全国に散在していた機大工が極めて少なくなっている。そこで、地元でプロ機と呼ばれている厩機の製作技術を会得した職人を養成し、機台の需要に対応している。

④後継者の養成：

「きぬのふるさと岡谷絹工房」を主宰する宮坂博文氏の指導による染織、精練等の後継者研修事業を実施し、「おかや絹」のクリエイターの育成を行っている。

⑤「おかや絹」の広報活動：

「おかや絹」の製法と特徴をPRするため、繭糸の手引きからあしぎぬ糸を手織り機で織り上げるまでの一連の作業工程を説明した日・英・仏3カ国語のDVDソフト、パンフレット等を作成・配布するなどの広報活動を行っている。



上州式座繰り器による繰糸

3. 「おかや絹」の特徴

「あしぎぬ糸」は、座繰り繰糸法によって製造された300～350dの太織度の生糸でひずみが少なく、膨らみがあって伸縮性に富んでいる。そのため、この生糸の製品は普通生糸の製品とは異なり、古くは一般庶民の間で愛用されていた絹織物の風合と独特の光沢を持ち、暖かくてしわにもなり難く、洗濯もし易いなどの特徴を持っている。この様な特徴を活かしてネクタイやマフラー、ショール、テーブルマット・クロス、タペストリー、ジャケットなど日常生活に密着した洋装用品、生活用品に供されている。



岡谷絹製品

4. 「おかや絹」の展示普及

今まで海外ではパリノール見本市(メゾン・エ・オブジェ 06'、07')に出展し、国内では一般消費者向けの展示会(TOKYO URBAN LIFE 2006)、専門業者向けの展示会(TOKYO 05'、06' CREATION LIFE)等に出展するなどして販路拡大に務めている。

また、「きぬのふるさと岡谷絹工房」内のショールームで各種製品の展示販売も行っている。



フランスにおける製品展示

このように、岡谷絹ブランド推進協議会は新製品開発をはじめ、織り手など技術者の育成、技術向上に努め、生産から販売まで一貫した体制で「おかや絹」をブランド化して世界に発信する事業を推進している。